

## 平成22年度 FD活動の実績報告

平成22年度企画委員会

Faculty Development Activities in School of Nursing and  
Health, Aichi Prefectural University

Kikakuiinkai

愛知県立大学看護学部企画委員会が企画運営した平成22年度FD活動の実績をまとめ、今後の課題を明らかにするために、FD研修会に焦点をあてて実施経過を概括した。FD研修会は、年度当初に行った教員の研修ニーズ調査結果と、大学や社会における教育および研究に関する課題をふまえて企画され、年度計画の通りに実施された。FD研修会は11プログラムで、企画意図に沿った多数の参加者を得ており、実施後の参加者の評価はいずれも良好であった。予算確保、大学と教員のニーズにそった企画調整、講師および参加者の参加しやすい研修の工夫が課題である。

キーワード：Faculty Development, 教育力向上, 看護技術教育力, 研究力向上, 研修会

## はじめに

本学部では平成15年度に前身の愛知県立看護大学にFD委員会を設置し、学部内でFDに関する共通認識を得ながら基本方針を定め、平成17年度からは、「本学部の教育理念を実現するために教員の教育能力の向上への支援及びその評価を行い、大学全体の教育機能の向上を図る」ことを基本方針として、教育内容の検討、教育活動評価、教育方法向上支援を3本柱として活動を展開してきた。これらの活動は、平成21年度の旧愛知県立大学との統合により新しい愛知県立大学看護学部が発足した後も引き継がれ、計画的なFD活動が実施されている。

愛知県立大学看護学部・大学院看護学研究科のFD活動は企画委員会が中心となり、FD研修会、学生による授業評価、などを企画・実施している。本報告では、FD研修会に焦点をあてて本学部のFD活動の実施経過を評価し、今後の課題を検討する。

I. FD研修会のニーズ調査結果と年度計画  
(表1, 表2)

FD研修会を教員のニーズに対応したものとするため

表1 FD研修会の希望

内容	希望年度別人数*	
	H22	H23
〈教育力向上のための研修〉	46	14
1. 続「授業の工夫」	10	0
2. 授業における模擬患者の活用、見学	10	4
3. ティーチングティップス (授業の秘訣集)	9	5
4. 日常生活援助技術	8	2
5. Moodle研修会	5	2
6. フィジカルアセスメント	4	1
〈研究力向上のための研修〉	54	20
1. 研究の倫理的配慮と研究倫理審査申請書の書き方のポイント	12	1
2. SPSSによる統計分析入門編	10	3
3. AMOSによる分析	10	4
4. SPSSによる多変量解析	9	5
5. 科研究取得のための秘策、よりよい申請書の書き方など	1	1
6. その他 (パワーポイント資料の作成「いろは」から極意 など)	12	6

\*平成22年度に2年間の希望を調査した結果

表2 平成22年度のFD企画(計画および実施状況)

	企画名 [実施方法] 講師	企画意図 (目的, 対象, 位置づけ)	実施日時, 参加数
1	「教育力向上のための生活援助技術スキルアップ研修」 [講義と実技] 紙屋克子先生 (静岡県立大学看護学研究所) (インストラクター5名)	目的: 看護実践のコア技術である生活援助技術 (体位変換および移乗技術) を根拠をもって効果的に教育するために, 教員のスキルアップをはかり教育力向上をめざす。また, 講師が取り組んでいる遷延性意識障害患者に対する生活行動の再獲得へのアプローチを学ぶ。 対象: 学内実習・臨地実習に関わる看護教員 (20~30名) 位置づけ: 前年度の企画は好評で, さらに進んだ技術研修やさらなる習熟をめざす再研修をのぞむ声があり, 技術習熟のための再研修と, 高度技術を学ぶ企画とした。	3/10 (木), 3/11 (金) 10:00~16:00 (両日) 1日目14名, 2日目18名のべ32名 (教員32)
2	「フィジカルアセスメント研修会」 [講義と実技] 橋本秀和先生 (学内講師)	目的: 教員の看護実践力 (フィジカルアセスメント) を高めることにより, 教育力向上をめざす。 対象: 学内実習・臨地実習に関わる看護教員, 大学院生 (将来教員となる者の教育力育成に寄与する) 位置づけ: 特に新採用教員のフィジカルアセスメント能力を育成するために, 平成20年度より毎年開催している企画である。	8/30 (月), 9/10 (金) 13:00~16:00 (両日) 1日目11名, 2日目14名のべ25名 (教員9, 院生16)
3	「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する考え方の動向」 [講義] 鎌倉やよい先生 (学内講師)	目的: 無資格者である学生が臨地実習において行う看護技術に関する基本的な考え方を文部科学省, 厚生労働省の報告書をもとに十分に理解することにより, 適切な実習環境の整備と学生の事前準備の徹底をはかる。また, 教育方針・方法などの検討の基礎とする。 対象: 学内実習・臨地実習に関わる看護教員, 大学院生 (将来教員となる者の教育力育成に寄与する) 位置づけ: 学生の事前準備の整え方などに関する討議にもつながる学ぶ企画とした。	11/1 (月) 11:00~12:00 20名 (教員15, 院生5)
4	「初年次教育科目をつくる〜導入と実践」 [講義と演習] 中島誠先生 (三重大学高等教育創造開発センター)	目的: 教育方法 (授業の工夫) の具体的な実践を学ぶことにより, 教育力向上をめざす。 対象: 全教員 位置づけ: 前年度の企画は好評で, さらに進んだ授業の工夫を知りたいという希望が多かった。そこで, より実践的な方法を学ぶ企画とした。	3/16 (水) 13:30~15:00 39名 (教授8, 准教授・講師10, 助教17, 院生3, 職員1)
5	「Moodle研修会」 [講義と実技] 箕浦哲嗣先生 (学内講師)	目的: 授業やグループ指導などに活用されるMoodleの手法を学ぶことにより, 教育力向上をめざす。 対象: 全教員 位置づけ: 前年度の研修が好評であった。有効活用のための再研修, 参加できなかった教員の要望への対応を意図して継続企画である。	4/2 (金) 10:00~11:00 9/21 (火) 13:00~14:00 1日目25名, 2日目10名のべ35名 (教授9, 准教授・講師11, 助教・助手15)
6	「授業評価についての学生と教員による意見交流会」 司会: 米田雅彦, 出席教員: 佐藤美紀・古田加代子・山口桂子 (企画委員), 学務課	目的: 授業評価の実施方法や成果などについて学生と自由に意見交換することにより, 授業評価の評価, 教育改善の検討を行う。 対象: 学生 (有志), 企画委員会委員 位置づけ: 学生による授業評価を導入して数年になる。それらの活動評価となる企画である。結果は教員および全学FD委員会に報告する。	1/25 (火) 12:30~14:10 7名 (4年生)
7	「パワーポイント資料作成 [いろいろ] から極意」 [講義と実技] 箕浦哲嗣先生 (学内講師)	目的: 授業や研究発表で活用されるパワーポイントの基本を学ぶことにより, 教育力・研究力の向上をめざす。 対象: 全教員 位置づけ: 教員からの要望に応じた新企画である。	11/1 (水) 16:00~17:00 2/11 (火) 17:00~18:00 1日目21名, 2日目15名のべ36名 (教授7, 准教授・講師8, 助教・助手17, 職員4)
8	大学院授業「多変量解析論」の聴講 [講義と実技] 箕浦哲嗣先生 (学内講師)	目的: 統計分析方法の学習により研究力・研究指導力向上をめざす。 対象: 全教員 (授業に影響が出ない人数) 位置づけ: 教員からの要望に応じた新企画で, 他の教員の授業を聴講する形態のFD企画である。	5~7月 6名 (教員)
9	「教育力・研究力・研究指導力向上を目指したITC研修会」 [講義と実技] 箕浦哲嗣先生 (学内講師)	目的: 統計分析方法の学習により研究力・研究指導力向上をめざす。 対象: 全教員 (多変量解析の基礎を理解していることが条件) (「多変量解析論」を聴講または講師作成の授業資料を事前に熟読) (20名程度) 位置づけ: 教員からの要望に応じた新企画。	I期9月, II期3月18日・24日 (同内容を2回) 13:00~15:00 9名 (教員) I期・II期セット
10	「看護研究における倫理の考え方」 [シンポジウム] ・高島忠義先生 (副学長) ・鎌倉やよい先生 (学部長) ・坂上貴之先生 (慶応義塾大学)	目的: 研究初学者が基本的に理解しておきたい研究倫理について, とくに人を対象とした実験研究において留意すべきことを学ぶことにより, 研究力および研究指導力の向上をめざす。 [各講師のテーマ] ①高島先生: 研究倫理の歴史的背景-国際法に関連させて, ②鎌倉先生: 看護における臨床研究倫理, ③坂上先生: 人を対象とした心理学実験における研究倫理 対象: 全教員, 大学院生 位置づけ: 研究倫理の初級編 (Part1) として企画した。	9/9 (木) 10:00~12:00 52名 (学部教員33, 院生15, 職員2, 他学部教員2)
11	「研究の倫理的配慮と研究倫理審査申請書の書き方のポイント」 [講義] 山口桂子先生 (研究倫理審査委員会委員長)	目的: 研究倫理審査申請書の書き方に焦点をあて, 研究の倫理的配慮と, 研究倫理審査申請書の内容の意図や書き方を理解することにより, 研究力および研究指導力の向上をめざす。 対象: 全教員, 大学院生 位置づけ: 研究倫理審査申請を円滑に進めることができるように, 研究倫理の初級編 (Part2) として企画した。	10/6 (水) 17:30~18:00 12名 (教員11, 職員1)

に、平成22年度（以下、今年度とする）当初の4～5月に研修ニーズ調査を行った。調査では今年度および次年度の2年間の希望を質問した。その希望の結果を表1に、希望をふまえて立案・実施したFD研修会を表2に示した。

教育力向上のための研修としては、前年度に実施した「授業の工夫」などと「日常援助生活技術」の研修の希望が引き続き多く、また、2年前から実施しているフィジカルアセスメント研修についても継続希望があり、大学院生からも希望が多かった。よって、これらは今年度も企画した。また、研修希望は無かったが、学生による授業評価について具体的な意見を幅広く聴取するため教員との交流会を企画した。さらに、臨地実習において無資格者の学生が看護技術を実施するうえでの注意点を周知する必要性から、「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する考え方の動向」の研修を企画した。なお、模擬患者の活用に関する研修希望も多かったが、学外者への模擬患者の依頼のためには別途予算が必要であることなどから、FD研修会には位置づけなかった。

研究力向上のための研修としては、「研究の倫理的配慮と研究倫理審査申請書の書き方のポイント」の希望が多かった。段階的に理解を深めるため、まず、看護研究における倫理の考え方に関するシンポジウムを行い、次に研究倫理審査申請書の書き方と倫理的配慮についての研修を行うよう企画した。SPSSおよびAMOSを使った分析・解析の研修は例年希望者が多いが、講師謝礼等の予算が確保できないため、学内教員の協力を得て、ミーティング形式の「教育力・研究力・研究指導力向上を目指したITC研修会」と、基本となる多変量解析について

大学院授業の「多変量解析論」の聴講を企画した。また、プレゼンテーションの技術向上のためにパワーポイントの活用の研修を企画した。

## II. FD研修会の実施および評価

FD研修会の実施・参加状況を表2右列にまとめた。各講師と参加者の協力により、企画の目的にそって順調に実施された。以下に各企画の詳細および実施状況に関する簡単な説明と評価を記載する。

### 1. 教育力向上のための企画

#### 1) 生活援助技術スキルアップ研修

昨年度の好評を受け、さらに内容の充実をはかるため研修時間を増やした。参加者の感想は表3に示す。紙屋講師による理論的な知識と実践における適用例などの講義と実技指導が交互に展開され、実技指導では、インストラクターによるデモンストレーション見学後に参加者が患者役・看護師役となり繰り返し実習を行った。研修内容は研究成果を踏まえて更新されており、研修項目も増え、受講者の高い満足が得られた。特に2～3人の受講者に対してインストラクター1名が付いて指導を受けられたことについて良い感想が多く、さらにインストラクターや講師の考え方、演示方法などにも感銘を受けていることが感想からうかがえた。学生指導に役立つヒントを得たとの感想もあり、体位変換や生活支援技術のスキルはもとより、看護の役割や実践面の効果をふまえて学生指導に活かすことができる研修となった。

表3 「生活援助技術のスキルアップ研修」参加者の感想

記載：8名（ ）内：件数

主な内容	具体的な意見（要約）
1. 丁寧でわかりやすい講義と演習により根拠と実践について理解が深まった(13)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2～3人に1人のインストラクターも付き、理論から実技まで丁寧に教えていただいた(5)</li> <li>・講義と実習を通してナーシングバイオメカニクス、生活支援技術の根拠と実践が理解できた(8)</li> <li>・実践の話なのでとてもわかりやすく、興味深く聞くことができた(3)</li> <li>・楽しく内容の濃い研修に参加することができ、大変勉強になった(1)</li> <li>・その都度、質問をして疑問を解決することができ、とても有意義であった(1)</li> </ul>
2. 講師の看護観や研究の視点などから学ぶことが多かった(7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・科学的根拠を元にした説明と実践の成果を聞き、看護に対する可能性を見出すことができた(3)</li> <li>・紙屋先生の看護の考え方や研究の視点、人柄から学ぶことが多かった(2)</li> <li>・講義では実際の事例を通して、改めて看護技術の力を見直すきっかけとなった。忙しく日々の業務に追われる中では、看護の役割について疑問に思うことも多く、初めてワンケア、ワンギフト、ワンリハビリという言葉聞き、常にこの思いで看護を行って行けるといいと思った(1)</li> <li>・看護に対する魅力をもっと学生に伝えていくことができるとよいと考えた(1)</li> </ul>
3. 今後の教育や実践にいかせる(4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後の演習の指導方法や教育にも役立てることができる大変有意義な内容だった(2)</li> <li>・今回の内容は脳外のみならず、関節拘縮や筋力低下した患者にも実践できる方法だと思う(1)</li> <li>・インストラクターの方のデモンストレーションの動きが美しく見習いたいと思った(1)</li> </ul>
4. その他(6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もっと多くの方が受講できて、体位変換技術を含めた一連の生活支援技術とその理念や理論を共有できると良いと思った(3) 他3</li> </ul>

## 2) フィジカルアセスメント研修

バイタルサインから頭頸部、循環器、呼吸器、腹部、神経系のフィジカルアセスメントの講義と実践を2回に分けて行った。部位別に進行していくことから、スケジュール調整が困難な教員のために1回のみも参加可とした。ここ数年継続している研修のため、参加教員は新任者に限られる傾向があるが、将来、教職に就く可能性のある院生の参加は安定しており、次年度も継続が望まれる。参加者の感想は表4に示した。丁寧な指導と資料のわかりやすさに定評のある実践力が高まる研修である。

## 3) 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する考え方の動向

臨地実習において無資格者である学生が行う看護技術については、その基本的な考え方を文部科学省、厚生労働省の報告書をもとに十分に理解することが必要である。その理解のもとに適切な実習環境の整備と学生の事前準備の徹底をはかることができることを意図して、法律や報告書のポイントをおさえた講義をしていただき、臨地実習担当教員と院生の参加により充実した研修となった。なお、講師には、学部学生に対しても同内容の講義をしていただいた。このことにより、学生と教員双方の認識を高めて臨地実習にのぞめる研修となったと考える。

## 4) 初年次教育科目をつくる～導入と実践～

昨年度の「授業の工夫」の続編として、「続・授業の工

夫」の希望が多かったため、昨年度講師に相談し、高等教育創造開発センターの専任講師でFD活動に精通している講師を紹介していただいた。当初は授業方法に関する研修を考えたが、近年、初年次教育の重要性が示唆されていることから、その具体的な展開方法を学ぶ企画とした。講義の後に、『看護学部版初年次教育を「ポジティブに」考える』というテーマで、①初年次教育で伝えたいことを考える、②初年次教育に役立つ組織の「強み」を考える、の2つのグループワークを実施した。アンケート結果は表5に示すとおりで、初年次教育の概要や方法とともに、グループワークにより具体的な展開方法についても理解が深められた。

## 5) Moodle研修会

Moodleは無料で設置できるe-Learningシステムであり、授業やゼミ単位で設置が可能である。ネット上の議論、課題提出、ファイルの保存、双方向の連絡等ができ、学生と教員、学生同士のコミュニケーションツールとして有用であることから、各教員が授業に取り入れることにより教育力の向上がはかれればと企画した。昨年度に続き、今年度は昨年受講できなかった教員や、再講習を望む教員の参加による研修となり、この2回の研修ではほぼ半数の教員がMoodleに登録し操作方法を学んだ。感想は表6に示すとおりで、わかりやすく、Moodleは便利だという実感につながる研修となった。

表4 「フィジカルアセスメント」参加者の感想

記載：7名（ ）内：件数

主な内容	具体的な意見（要約）
1. 丁寧な指導とわかりやすい資料により理解しやすかった(9)	・わかりやすい説明と丁寧な指導により、限られた時間の中で実践をしながら基礎的な知識を得ることができた(4) ・プリントをいただき、解剖とリンクさせて学習することができ、理解が深まった(2) ・イラスト集や教科書と連動していてわかりやすく、参照しやすくてすばらしい(1) ・指定テキストは入手できなかったが、閲覧できる指定テキストが準備され、支障なく学習できた(1) ・正しく観察するためにも、身体の構造や機能の理解が必要であるとよく理解できた(1)
2. 聞きやすい雰囲気で実施しやすかった(3)	・人数も多すぎず、少なすぎずとても良かった。そのため、講師にも質問しやすかった(2) ・ちょっとした事も聞きやすい雰囲気で、あたふたしたり萎縮したりすることなく実施できた(1)
3. 今後の授業や実践にいかせる(2)	・多くの事象の意味がわかり、実践できるようになったと感じる(1) ・フィジカルアセスメントの授業を担当するため、演習形式の研修を受ける事ができてよかった(1)
4. モデルの配置がよかった(2)	・モデルのアセスメントを行うことで、他の参加者と相談しながら実践できる点がよかった(1) ・モデルがいたために実技に集中でき、スムーズに演習できた点がとてもよかった(1)
5. お互いに実施してもよかった(2)	・参加者同士でできる項目は、お互いに実施すれば時間短縮になるかと思う(1) ・被験者の体験による学びもあるので、合意が得られれば、参加者同士で行う方法もよいと思う(1)
6. その他(5)	・看護師が臨床で実際に行っているフィジカルアセスメントの範囲を考えた。私が臨床で働いていた時には活用する機会がなかった項目（眼底の観察など）もあり、実際に看護師が臨床で活用するフィジカルアセスメント技術が明確になれば、より実践的な教育につながると思う(1) 他4

## 6) 「授業評価についての学生と教員による意見交流会」

全学で取り組んでいる学生による授業評価では各評価点に対する理由などを知ることができないため、また、授業評価の方法に関する回答者となる学生自身の意見を

知るため、授業評価に関する率直な意見を聴取する交流会を企画した。なお、これについては、全学教育研究センターにおいても年度の活動項目としてあげられ、全学企画として実施されたが、看護学部生の参加が授業時間割上からも難しいため、その一環としての位置づけもあり、学部単位で実施した。学生の自由な発言を保証し幅広い意見を聴取するため、成績評価が終了した時期に、4年生に対して参加の呼びかけを行った。参加者は7名と少なかったが、率直な意見が聞かれた(表7)。授業評価については、回答しにくさ、授業評価結果の授業改善への活用に対する疑問が多く聞かれた。また、講義や実習指導方法の内容や教員間のバラつきなどが指摘された。これらの貴重な意見を具体的な改善につなぐために、意見は検討を担当する委員会名を付記して教授会に報告した。

表5 「初年次教育科目をつくる」参加者の感想  
記載：30名

項目	人数	(%)
講演内容の満足度	満足	12 (40.0)
	やや満足	14 (46.7)
	どちらとも言えない	3 (10.0)
	やや不満	1 (3.3)
講演内容は役立つか	役立つ	10 (33.3)
	やや役立つ	15 (50.0)
	どちらとも言えない	4 (13.3)
	あまり役立たない	1 (3.3)
講演時間の適切さ	適切であった	23 (76.7)
	短すぎた	5 (16.7)
	長すぎた	2 (6.6)

[自由記述] 記載12名 (件数)

〈グループワークがよかった(15)〉

- ・集団思考で改めて本学の強みや他の教員の考え方がわかった(6)
- ・グループワークが具体的に方法や考え方を学べた(3)
- ・講演もワークもよかった、楽しかった(3)
- ・グループワークの時間が短かった(2)
- ・少し考えただけでも多くのアイデアが出て驚くと同時に常に改善を目指して考えていくことが大切だと改めて思った(1)

〈わかりやすく理解できた(4)〉

- ・初年次教育の概要から方法・課題などのポイントがまとまっており、よく理解できた、イメージがついた(3)
- ・グループワークへの講師のコメントにより視野が広がった(1)

〈その他(3)〉

- ・初年次教育をどのように考えて組織づくりや立案するかなど具体的な方法も知りたかった(2) 他1

## 2. 研究力向上のための企画

## 1) 「パワーポイント資料作成『いろは』から極意まで」

学会発表や報告において、より読みやすく、分かりやすいパワーポイント資料が作成できるように、機能の活用方法と、上手なプレゼンテーションのためのポイントについて研修を行った。1回目の参加募集の際に職員からも参加希望があったため、2回目は全教職員に案内を出して参加を募った。感想は表8に示した。日頃よく使うパワーポイントであるが、知らない機能や特徴を参加者全員が学び、不確かな操作やプレゼンテーション方法を見直して成果を得ており、非常に有意義な研修となったことがわかる。この研修の成果は、研修に参加した教

表6 「Moodle研修会」参加者の感想

記載：11名 ( ) 内：件数

主な内容	具体的な意見 (要約)
1. わかりやすくよい研修であった(7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おもしろかった、わかりやすかった、大変よい企画であった(5)</li> <li>・丁寧に教えていただいたので使い方は少しずつわかってきた(1)</li> <li>・資料も作っていただいたので、後からふり返ることもできてとても助かる(1)</li> </ul>
2. Moodleは便利・役に立ちそう(6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・使いこなせば、便利なツールになると思った(2)</li> <li>・双方向性の授業を少人数で行うには便利と思った(2)</li> <li>・Moodle導入により、個人にあった教育が展開できると思う。今までのグループワークでは、発言力の強い学生の意見に流され、議論することより成果物を仕上げることに重点を置いていて、各自の学びの深まりがみられなかったように感じていた。実際に学生もそのような発言をしている(1)</li> <li>・Moodleを使って、企画委員会FD研修会コースが作成できれば、参加できなかった教員も様子が覗けていいかもしれない。そんなふうになると、学部でのMoodle利用率は高まり、FD対象者が参加教員だけでなく、FD活動にも役立つのではないかと(1)</li> </ul>
3. 自分も使ってみたい(3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生は利用できるもので、自分の授業でもゆくゆくは使えるようにしていきたい(1)</li> <li>・小テストや投票をうまく使って、学生の予習、復習を促したり、授業への関心を高めることができるようなので、そのあたりの作成方法も再度やってみたい(1)</li> <li>・例えば領域別でグループを組んで一つのコースを作成するのも面白いと思った(1)</li> </ul>
4. その他(4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業たとえば、グループワークなどにどのように活用するのかなど、実際編をお願いしたい(2) 他2</li> </ul>

表7 「授業評価についての学生と教員による交流会」における意見

記載：7名

	主な項目	具体的な意見（要約）
授業評価について	1. 授業評価の方法(6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「成績評価の基準が明確でしたか」の項目は、成績をもらっていない時点では付けにくい</li> <li>・「成績評価の基準が明確でしたか」の項目は、シラバスに具体的に書いてあるかで回答した</li> <li>・オムニバス形式の授業では、各教員に対する評価が異なる場合があり、評価に迷うことがあった</li> <li>・評価基準の「そう思わない」に対して具体的内容の記入欄がないので、評価理由を伝えるにくい</li> <li>・マークシートの裏に書くようにということだが、自由記載は項目がないと書きにくい</li> <li>・授業評価のために与えられる時間に教員ではらつきがある</li> </ul>
	2. 授業評価結果の活用(6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価基準の「そう思わない」にチェックしても、多数派の意見に消され、教員がきちんと受け止めているかわからない</li> <li>・評価基準の「そう思わない」が付いた場合、教員はその具体的な理由まで理解できているのかと思う</li> <li>・授業評価がどのようにフィードバックされたのかわからない</li> <li>・学生の多くが低い評価をしている教員がいても、「言っても変わらないのであきらめた」という感じで言わなくなっていることもある</li> <li>・(集計結果、自由記載を教員本人には返しているとの説明に対して) 本人だけが点数を見るのでは改善が難しい部分もあるのではないかと思うので、他の教員との横のつながりで結果を理解し、改善点を見出すなどしていくのがよいのではないか</li> <li>・毎年の授業に変化が見られない非常勤講師もいるが、非常勤講師にもフィードバックされるのか、評価の悪い非常勤講師の交代は出来ないのか</li> </ul>
授業・実習指導について	3. 授業・成績評価について(5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・よい授業について教員と学生で温度差がある</li> <li>・卒業研究は最低限の指導方法を教員で統一または共通認識して欲しい</li> <li>・非常勤講師には、自分の専門分野、関心が高い事柄だけを話す講師がいる。その部分の講義に終始するのはやめてほしい</li> <li>・教員と意見の合わない答案を書くと、成績が悪くなる科目がある。採点基準もあいまいであり、採点に不満が残っている</li> <li>・授業の態度を評価して欲しい</li> </ul>
	4. 実習指導について(4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習指導において、実践重視、記録重視など同一領域でも教員の指導にばらつきがある</li> <li>・教員から実習場面で具体的なことの指摘はなく、「いいんじゃない」と一言の評価だけでは、逆に不安になる場合がある。何が良くて、何ができていないかももう少し詳細なフィードバックがほしい</li> <li>・実習終了時には、自分を客観的に振り返るうえでも、個人面接があった方がいい</li> <li>・実習後の個人面接で指導に関する意見を聞かれても、指導してくれた本人には言いづらい</li> </ul>
その他	5. 動機づけ・教員との関係形成(5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一つの講義でも学生によってモチベーションが違う</li> <li>・学問としての興味関心を学習の動機付けにしたいので、教員が「テストに出る・出ない」を取り上げて動機付けにすることはしないで欲しい</li> <li>・対象となる学問が好きと感じるとモチベーションが持てるが、嫌いだとモチベーションが下がることがある。そんな時でも教員との親近感、信頼関係でモチベーションは変化するので、教員に親近感が増すような機会があればよい</li> <li>・指導教員制度、オフィスアワーが十分に生かし切れず、教員との相談関係が作りにくい</li> <li>・教員から積極的に学生に声をかけてもらおうと、話したり相談しやすい</li> </ul>
	6. その他(1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学や教員に意見を言える形を整えて欲しい。「目安箱」は認知度がひくい</li> </ul>

員の指導を受けた学部生や大学院生による卒業研究、大学院の発表会など、学内の場だけではなく、学会などの学外においても発揮されるものである。聴衆に伝わるプレゼンテーションの水準を高めることは、間接的ではあるが、研究成果の社会への還元や、教員や卒業生・修了生を介して本学の社会的評価の向上につながるものと考ええる。

## 2) 大学院授業「多変量解析論」の聴講

大学院看護学研究科博士前期課程の授業である「多変量解析論」の聴講を全教員に案内した。6名の教員からの申請があり、担当教員の承認を得た。ただ、開講日が水曜日の3限であったため、諸会議と重なり聴講できない教員が多かった。多変量解析の研修希望は例年多いことから、日程があえば聴講者が増える可能性があるのでは

もう少し参加しやすい状況を検討する必要がある。

## 3) 「教育力・研究力・研究指導力向上を目指したITC研修会」

多変量解析の基礎を理解している教員の研究力と研究指導力の向上を意図して、基礎から論文用の図表作成までをサポートするゼミタイプでの研修を計画し、9名の教員が参加を申し出た。

## 4) 看護研究における倫理に関する資質向上のための企画 (1) 「看護研究における倫理の考え方」シンポジウム (研究倫理初級編Part1)

看護研究では、看護ケアを提供する看護職もしくは研究者が、ケアの受け手やその周辺の人々、関連する人々を対象に研究を行うことが多く、研究実施に際して対象

表8 「パワーポイント資料作成」参加者の感想

記載：15名（ ）内：件数

主な内容	具体的な意見（要約）
1. 知らない機能や特徴を知ることができてよかった(14)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日頃操作しにくかったこと（簡条書き、テンプレートなど）の解決策がわかった(7)</li> <li>・知らない機能、便利な操作方法を知り、とてもためになった(5)</li> <li>・専門家に講義していただく、よく知っているように思うことでも、新しい発見がある(1)</li> <li>・2007の特徴も理解しつつPP作成の注意点を知ることができた(1)</li> </ul>
2. プレゼンの資料作成、発表方法を理解できた(7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的なことから本に書いてないことまで、一番見やすいパワーポイントの作成方法をわかりやすく教えていただいた、今後に活用したい(3)</li> <li>・医師から「スライドがビジー」「言いたいことがいくつも載せてあり見づらい」「字が小さい」などと言われていた意味がようやくわかった(1)</li> <li>・スタンダードを知り、相手の記憶に残るキーワードを記述する意味を再認識できた(1)</li> <li>・プレゼンでは主にスライドに力を注いでいたが、話す技術も必要だとわかった(1)</li> <li>・学会発表時のスマートな技も教えていただき、大変ありがたかった(1)</li> </ul>
3. 大変わかりやすかった(3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明がとても分かりやすかった(2)</li> <li>・資料もとても分かりやすいので、後から見返すのに便利(1)</li> </ul>
4. 自己流の操作の確認ができた(2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文字の大きさや色などは自分も心がけていたところが確認できてよかった(1)</li> <li>・自己流に作成していたパワーポイントについて自信がついた(1)</li> </ul>
5. その他(2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今日の研修会で「いろは」を教えて頂き、逃さずに使いたい(1) 他1</li> </ul>

者の尊厳及び権利を尊重し、かつ不利益を最小限にし、プライバシーを遵守するなどの姿勢が必要である。その倫理的配慮の基本的考え方について、歴史的背景から現状の課題を含め、話題提供およびディスカッションを通して課題を共有することをねらいとしてシンポジウムを開催した。各講師より約20分の話題提供をしていただき、その後テーマに沿ったディスカッションを約30分行った。多くの教員が参加できるように9月に開催し、参加者は学部外教員を含めて52名と多かった。アンケートの回答は表9に示したとおりで、内容は有意義であり（有意義51.3%、やや有意義43.6%）、満足が得られている（満足46.1%、やや満足43.6%）。感想をみると、研究初学者や大学院生には特に好評であり、倫理審査に関する意見も寄せられた。（表9）

#### (2) 「研究の倫理的配慮と研究倫理審査申請書の書き方のポイント」（研究倫理初級編Part2）

先の看護研究における倫理に関するシンポジウムに続く企画として、本質的な研究の倫理的な配慮と研究倫理審査申請書の内容のつながりの認識を高めることをねらい、研究倫理審査申請書の書き方に焦点をあて、具体的な書き方やポイントに関する講義を企画した。ことに、初めて研究倫理審査申請書を作成している教員や作成予定の教員を対象として意識し、研究倫理審査委員会委員長に講義をしていただいた。この企画は研究科委員会との合同開催とし、大学院生にも参加を呼びかけ、大学院看護学研究科博士課程前期の研究計画発表会後に開催した。

表9 「看護研究における倫理の考え方」参加者の感想  
記載：39名

項目	人数（%）
シンポジウムの満足度	満足 18 (46.1)
	やや満足 17 (43.6)
	どちらとも言えない 3 (7.7)
	不満 1 (2.6)
内容は有意義か	有意義 20 (51.3)
	やや有意義 17 (43.6)
	どちらとも言えない 2 (5.1)
時間配分の適切さ	適切 38 (97.4)
	討論時間が長すぎた 1 (2.6)
全体討論の展開	適切 34 (87.2)
	難しかった 3 (7.7)
	無回答 2 (5.1)

[自由記述] 記載11名（件数）

- ・研究倫理の問題やデータの取り方、研究計画の考え方など具体的な話を伺うことができて大変勉強になった(4)
- ・初学者として計画書作成で倫理に悩むことがあり大変参考になった(2)
- ・M1が計画書を作成する時期のTimelyな企画で大変よかった。重要なテーマなので、毎年受けられるようにしていただきたい（鎌倉先生の内容だけでも）(2)
- ・強制力を抑制するための実際の工夫などについてもう少し時間をとって討論できたらよいと思った(2)
- ・本学の倫理審査のシステム、申請書の内容を見直しする必要があると思った。研究及び倫理審査がスムーズにいくようにすることが大切である(1)
- ・申請書は利益相反・健康被害の補償等、臨床研究/疫学研究が必ず記載すべき内容を項目立てすると書き忘れがなくなると思った(1)
- ・大学の倫理委員会・審査自体もOpenにし、実状を公開してはいいか(1)
- ・時間が気になったこと、質問が具体的過ぎるように思えたので、質問をひかえてしまった(1)

### Ⅲ. 総 括

今年度も多様なFD研修会を企画運営し、学内外講師のご協力と参加者の主体的な取り組みによって充実した成果を得ることができた。

教育力向上のためのFD研修会は、ニーズ調査の結果を反映した企画であったが、とくに看護技術力を高める研修において助教から教授まで職位に偏らずに積極的な参加が得られている点は本学部の特徴と思われる。この背景には、本学部教育方針に看護実践力の向上が位置づけられ、教員自身が個々の看護技術力の向上と教育能力レベルの均質化が必要であることを共通認識していることがあると考える。授業の工夫や、教育や研究に活用できる種々のツールに関する研修は、日頃、教育方法などについて学ぶ機会が少ない教員にとって、その教育力を直接的に高めるFD研修会となり、どの企画も参加者が多いことから、今後も計画的に実施する必要があると考える。

研究力向上のためのFD研修会では、これまで予算が確保できず実現できなかった多変量解析に関する企画を、学内教員に講師を依頼したり授業聴講などを工夫したりしたことと、後述する予算確保の対処を行ったことによって実施できた。これは1つの前進ではあるが、学内講師の負担、参加しやすい体制整備など、今後の実施に向けての課題が残された。今年度の新しい取り組みとしては、研究倫理の基本となる考え方と倫理的配慮の具体的方法についての認識を高めるFD研修会があげられる。このFD研修会に関する評価は別に報告するので、そ

らを参照していただきたい。

### Ⅳ. 今後の課題

今年度の企画委員会予算のうちFD企画に使える金額は10万円程度であった。そのため講師料および旅費に費用のかかる「教育力向上のための生活援助技術スキルアップ研修」は魅力あふれる大学づくり関連事業に申請して採択された。また、「教育力・研究力・研究指導力向上を目指したITC研修会」も印刷および指導のための教材に費用がかかるため研修講師を代表として企画委員が参画し、これも魅力あふれる大学づくり関連事業に申請して認められた。その他の企画の多くは学内教員の理解と協力によって成り立っているのが本学のFDの特徴でもある。これは、学内教員の資質の高さを示すものとして高く評価できる。しかし、学外の識者を招いたFDにより大学力をさらに高める機会を設けることも必要であり、学部が独自に利用できる予算の確実な確保は今後の重要な課題である。

FDのねらいには、大学の理念の実現、社会の利益に資する人材育成などに貢献できる教員の資質向上と、個々の教員の学習ニーズの充足があるものとする。これらから導かれる多様なFDプログラムのニーズに対して効果的な企画を調整することと、研修会講師にとっても参加者にとっても負担が少なく、参加しやすい研修方法の工夫が求められる。

これらの課題の解決が、活発なFD活動の維持・向上につながるものとする。